



自 都 鄙 歳 且
 誹 大 三 物 次 弟
 諧 諸 國 引 付
九

~ 5
 6707
 3





5
06707
3

享保二丁酉

歳旦

尾陽

越人

[Faint handwritten text in cursive style, likely bleed-through from the reverse side]

人

一

九月
九日
卜

<2015-17>



堀井欽耕食帝力加何ハ
竟此臣の言也實ニ大恩不
恩大親不親之六ヶこと時今
太平此世よけ終く六十餘年
ハ之事なく日出く起入息
走誰々恩やや去る更よ
享保改元より仁徳日新
又日新今朝元日禮と云
き鳥帽紙衣箕舌と云
ハ〜 眠るやんきたら
山谷の漢雅の結句と云



享保二丁酉正月

尾陽名古屋

越智貞山子

元月

江南野水碧於天

中有白鷗閑似秋 越人

誰よ似く我ハ福積か毛やゆゆ

初鷄やくむゆハ〜の落處一空

三保の松此世此傳りヤ富士の門羽笠

耳ハ順ハ経も

約糸に衣れ多や先ハ六十日兼

我ハ〜老く

食成費ヤと而已ソん

一やせけ計りけしん雑煮夕道
若水よ一やせけ昔流しきり 且干

北雞の曉と昔の事々

鶉の声か来れ春の八男平 由之

高年ハシロクシ
字因丸ハシロク

敷の子やせけ経目と花はな 朝山

送馬よ入る世々老の春 仗宣

表うろちふと陰指物目哉 才維

大福帳ゆもらう家の具足餅 桃里

立田の江草もくや

今朝の春まき巻物に錦哉 一歩

李白百年三万六千日一目

須傾三百杯

益一何万石や千世の春 榎垣

中臣後所謂

天の益人や和光に物日新 叹業

塞翁も物持ハシロ今朝の春三語

さあ春と張ひ出 庭電 桃林

秦原氏

太平に世に鏡や具足餅 琴平

藝品茶各住

若水よ類の鏡のまよふ哉 左竹

藝品茶各住

約解の色の思ふ八倍り 炭 琴平

享保二丁酉

元旦

夕泉

空杯をり屠蘇三献は福壽草

筆に多しゆれ予世の試み 全

片きく経も開りもまき梅咲く 左

享保二丁酉

雞旦

國治雨后

湖島

くそく尺よ世れ月かたど鏡餅

日大足ハ樾ハ雀巣をく風 秋吟

脚音も長閑よ室く廊下を 栢里

其二

是造物者之無盡藏也

栢里

年々今朝の栢や花の露

空伐簷下 焚きお声 湖島

奈不よりハ山田也 秋吟

其三

我目の中は光り如金 秋吟

異國ハ和く賦れ今朝の春

やけの番も遠く色流る梅栢里

百千鳥園ハ小袖の模様めて湖島

享保二丁酉

履端

春のうらやまのこころを
とくちかた 三友

蓋も流るる雑草や同じ年の花

抱く抱ぬ子の乳と歯固 梅根

長閑さの鳥帽子はふれ地 瓶哉

其六二

舊年新志より後り伝はる 瓶哉

己より千世れぬを松傳り

扇二穂ハ勿論も弟のゆゑ三友

富ハ屋人と旅を春の耳に梅根

其六三

たへんをさうきりたれを瓶

酒舟は瀧と静き今朝の春 梅根

井筒は巻も録傳り 瓶哉

燃るも桐もふれをのぶと 三友

古亭景二丁酉

元旦

天の空戸高天原ハ
人々胸中よりく 兔耳

心のすめくのみさる初日哉

富哉嘶く千の春駒 市行

山吹や市よ小判の花咲く 黄雀

其二

はた黒條も世有てこ 黄雀

習し小鯛持持多や若恵比須

去年より今年幸甚しく眩杭

花の山花よ花よ花よわく市行

其六三

衣ア故カ繩ヅ袍フ衣ル靴ツ貉ク者シ立テ

市行

子路の氣を偽りて朝毎に年の禮

世ハ借ら好ふからぬ門松免耳

咲きりや咲ハと花よくさる眩杭

其六四

元朝より二月浮屠の如き事か
是神國の遠風ぬきり

佛法の波ぬるを今朝の春 眩杭

家々透来門よ門去 黄雀

長閑さく存くも記ても 免耳

享保二丁酉

歳旦

福神フクガミの我が家ウチノイヘ 文錦

ハを垣り年億氣元方棚

福も踏める権の派心 篋笠

人の見ぬ石成路句花えりて 豆花

其六二

松尾明神の酒壺と守り色シロイロ

ゆづりユヅリの松尾の社マツオノヤ

松尾の社を花の川傍り 豆花

若水河辺の井戸の洗文錦

曙や四季の内へ春は人簑笠

其六三

毛吹くものいそぐとけ登白終
誰とせぬ石平いふ中
簑笠

珠一や竹より昆竹門印徳經

辨財天の琵琶河弾絢豆花

春風の巖より吹かす柳と文錦

古子保二丁酉

二九日

正旦晝雞貼戸に百鬼畏

戸小晝鶏より八声八付色 向景

井に年光の屠蘇上は飛泉

一面の月強柳の月ひえは佳木

其六二

遠来山毛
垂所より 佳木

宝船堂の引りたる新春

鏡傍のり去る行燈向景

いつらもやあまの猫の 危と踊る 飛泉

其六三

頼義時仲夜てし
花

云平もく新八百草鳥帽子哉

系柳風よりほよきをそらぐ友賀

其六五

若水は佳き水に司りたり

人形より此起るや 直水

馬帽子圍り主水司りぬる春

四方舞はま流すは退く友賀

障りなく取れりるをば示し文石

古字保二丁酉

四始

硯の壽は世に以て教方と

之れにけ硯は程目録に 柗塘

千世は春をば松の本は硯

野老をば津の茶盤一面機石

清遠の懺は東風より臨之

其六二

内より君子の徳とす

之れくありとぞ人ば 臨之

未廣は世の要は鏡解

幾億兆の民より太箸 柗塘

紅い花は夜も漏れず機石

其六三

聖代の民も赤心の誠

あはれはけ中勢にこそ機石

腹思ふ民も女養乃腹赤哉

一カ家もや去位又く守臨之

名も苔梅も高ひとばせし柗塘

享保二丁酉

聖節

枝香

衾身やゆひもてきれ赤目し

福も来れとく本ぬ人思 里童

花小侍河の直賣を入船 素全

其二

千億の宿や縁の松うはら 素全

海老よ字解く短小裏白枝香

雉子番ひ巻栢流くおんあ里童

其三

里童

花よ行心七今朝の忌衣初

鼓の皮は赤く可威 素全

霞はむ二階座鋪はなれ 枝香

享保二丁酉

元會

盗人の乱世の事アッ今付

ゆせの通とゆはる戸もぬ

ゆるれは我思アッ 弓介

ゆらゆらいばる元五ヶ世の春

山里めいき町の川去却云

愁も入る青よ舟の垢よりて文雪

其二

夢より直よ

見れは成

文雪

今朝づせはなとハカレり

雁鳥の終

人

十

給は書松哉から糸金屏弓介
夜より猶ほ海は静めて却么

其六三

世は自由自在天神 却么

梅う校は赤糸今朝は多社哉

己辰抄出た音ハ柏千之雪

の 世の静けさ 扇の風 弓介

享保二丁酉

開端

家齊國治

國治天下平 晴山

木刀具足いりぬ世之今朝の春

屠蘇の泉一丁寸鏡餅 山扃

梅う香やニる床も静めて今始

其六二

百有餘年四海静きて

甲胃ハいりぬ世之今始

海老け具足とぬきり今朝の春

年よ一度かれぬ神馬草晴山

佐保姫の笑顔の艶哉花吹雪山扃

其六三

いせく事なるとい 山扃

万葉の胸や扇の桐村栴

又海老もと屠蘇一内集今始

幕くして春の野の浪はく晴山

享保二丁酉

改目

屠蘇屠絶思鬼

蘇醒人鬼志うたへ山眉

我翁と不老門也屠蘇の徳

上下く青とゆれ福菓利笑

名宗さよひ舞の端は夜とて約半

其二

久きれはかきと

神くさ決ハ不徳

利笑

若水のお琴くぬらふの柳

雑煮おけはきハ此、蛤古川

まの約く抱もさる子お抱く水月

其三

申持橙極儀とく

約半

月かたさハ二の後のまね歌

鼓くハ本は清ある早水月

笑の幕花もさるや花はて古川

其四

あゝかの見おはこと

はきあ

水月

元朝ヤナセくらまおす鶴の色

早手歌くは神眉

雛買や行お不、利笑

人

士二

其五

松の緑ハ水の色
は老の青ハ錦リヨリ
古川

門をに个鉤と清志宝船

新とーいめかゆ了納要の釣

折ふ木の栢子と釣もの
山肩

享保二丁酉

子影又サ仕了負承の首
成慕の秋仁傑り白雪入
も中成をぬハ皆又母と意ハ
丁也予世了初うく尾陽城下
る春成見ぬハ今今朝
頻る古郷と
思ふ

両親の壽たのむねと

角氣發注血那万本合

然も終業成かやいといはる

丁酉元月 古丈

二并ノ鶴の左右紅羽異ヤ門の松

舟の丁年成又人鏡餅合

中長八個守れ仁といひん合

丁酉三元 若水

御初ヤ百姓も足袋雪踏

春の田面了子世守れ鶴合

必流せハ押も障ぬれも合

丁酉改旦

善原牧所

松竹の齡成欲ひや屠蘇の酒 圓山

数枝子幼 ゴシボ 牛房運同ま豆 全

然るもかきとを裏に穿てけりて 全

丁酉 聖節 尾加太山住 水石

高砂の終や老人の年の禮

空麻極の沖鳥雲物 全

花入ハハ名花とかけまきと 全

丁酉三朝

市行子頻ハ歳且の發句せしと

ましくらぬくみ如何云物と知す

と云傳とハ只乃の上と返すく 六三蟬

りくくえぬ史姉娘とこの春

噫アハ長者ハ年ハ子ハ越人

さ人さとねく教ハ名ハ市行

享保二丁酉

元旦

器ハ終ハ今朝の春 尾加下上巻 傳 加吟

梅の之氣之南 正面 和笑

也ハ廣く揚ハ交

其二

垢ハ人毛新ハ今朝の春 交

梅ハ冠ハ加吟

手ハ和笑

其三

夕月とやあ
予常とれども

和笑

笑ひ出れば舞身も屠蘇やけさの春

梅もさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく

さくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく

元月

おのゝこゝとては且の地じや

又くこゝとては且の地じや

今朝の春や梅も花も甚な情一歩

享保二丁酉

三三九

農石

初まの蛙の吟う我ら句う

心まをみけはる 筆 亀考

家櫻門ハ押又吹まなく 素竜

其二

素龍

筆ハ本は心と極 花の春

心を本は心と極 花の春

霞ぬじ貨物死やや未坐光亀考

其三

亀考

初鶏よ渡る河のけし

朝風そよぐ伝はる竹 素竜

苗代ノ海地の字 改りく農石

享保二丁酉

雞旦

如鏡

羽弁去年以多やせしをりも

主水の目井封を解存行

花のつもと氷室守を待く申枕

其二

申枕

餅風流との耐取を在るや

毛所むまけくやと申底蓋如鏡

月ハ朧菊燈臺と桃カ存行

其三

存行

若水よ暇きんはと分給とそハ

里ハ門松道ハ十三年松申枕

周兩と同各日影長字也如鏡

尾形城下

鶴齡龜齒

一洲三寺去年之煙

越人目范蠡九右凡八百四十年ト

つゝま歡りまごあり況彭祖喬松

つねくいと名壽く目も及之所謂

歸命無量壽佛是也其法は次

かめ 祝ありくまき

元日

宣子保二丁酉

太著マ鬼ふか棒経あり 鳥承度又

裏白くもく立白の鼠本阿

け寺け六祖ハ里ハ室引上大椿

其二

大椿

万葉の負うや度りの小可鳥

あははのかや大星と舞象堂

一の酒押櫻とこさせく本阿

其三

本阿

御房を別れけこの夜鳥哉

大車流るせうさうし物受大椿

使者ハ作れく同句さるる帝象度

客座

享保ニテ周

元月

三石園筆

物籠や一夜動く周るより シラ

胡叟

鷓鴣

同所

秋冬

果且の物く似我の心より

千度明かす餅の還景河水

白山如法優しく様十令め素文 フゴロシヤレ

元日

三石園筆

碑碣碼磁珊瑚珠は唐やうり酒老

かゝ統家ヤ室もくも物月氣河水

元日

三加園晴
蒼帆

年一丸や梅も物として玉寂

盤もけ子の子乃子生趣 秋冬

は了舞の羽振はく形ハ蚤 胡叟

元旦

其のそくさくさく山一り
一に紙衣羽織似合
白張

逢来やとすは梅結う四十は智く

具足と丸く海老の歯同 秋冬

まもちしせや風をけとて胡叟

山々乃寄ハ富士に残り梅ハ
寂らあり万本一もち梅ハ
けく備ハ俗のやむ

髪中判好おらうはるの
類のせいらのそと今物
吹しむら

三列園晴
担洗

試お筆や坊主おの境

享保二十酉

聖節

山々水々くはらも石の
文作しぬもひのこも
と替之の言まひわ知ん物

三列園晴
夕待

笑水成ゆめをぬ名井哉

猪お結もく人や立春 川舟

毎日おやハおと 愚明

其二

萬葉八千世の請

松竹八葉形

愚明

ゆめをく千世を裁五尺身

鼻毛河板も梅成書祝夕待

蛙ち八洲濱の海やつらつら川舟

其三

神代の遺風け幸ふ御れぬか

一葉一葉頂に電と真直

川舟

神事はこのゆめを庭電

千穂一壺乃稻ハ空俵愚明

るぞも我目の下も長閑く待

元旦

予はつらぬ身なれど世はゆめ
君一奉はる御うれは真直

富民の振イケルは世中み心也
もろわれへ見あ物す地は月三為
君為民と車はあゆみの思ひは
少は中に豊と平はあはれは

三花ヤえ妻夫と酒のせし松花

元旦ヤ身もかむか鏡餅子あ

義之乃身も面目ヤ花の春種は

も笑ひもきり子もはる白水

享保二丁酉

雑旦

濃茹全尾

松擲

元朝ヤ五處へ去斗と同一事

あつ玉ヤ龍女も今このま全

約色ヤ師匠も人のぬき均不及

四丁賀

濃加全尾

姑ハシ一ハシ之ハシ下ハシ坂ハシの物ハシ日ハシ或ハシ陸ハシ舟

享保二丁酉

二元

孟宗ハシ母ハシ病ハシ入ハシりハシくハシ雪ハシ中ハシまハシに
簾ハシ衣ハシをハシ穿ハシれハシ母ハシハハシナハシしハシ病ハシ少ハシく
函ハシ々ハシとハシ語ハシあハシりハシ姑ハシハハシシハシとハシ
やハシてハシきハシいハシりハシとハシすハシ 三丁藤川
先子

ハシハシ子ハシ毛ハシ堀ハシらハシくハシ母ハシハハシシハシ雜ハシ者ハシ哉

千ハシとハシ千ハシ中ハシやハシにハシ塔ハシじハシ門ハシ去ハシ今

長岡ハシのハシ金ハシのハシ札ハシ付ハシのハシ跡ハシあハシりハシ趣ハシ人

享保二丁酉歲旦引付

負ハシ山ハシ子ハシ趣ハシ人

元日

冬ハシ六

初ハシちハシやハシ春ハシ立ハシ龍ハシのハシ吟ハシ一ハシ物

蓬ハシ来ハシやハシ山ハシ又ハシ山ハシへハシ登ハシれハシ 榎ハシ父ハシ泉

神ハシのハシ世ハシ々ハシ若ハシいハシれハシとハシ云ハシハ

えハシ幼ハシ乃ハシ事ハシ如ハシ也ハシ

大ハシ井ハシ戸ハシのハシひハシくハシれハシをハシくハシ鶴ハシのハシ色ハシ吹ハシ力

杖ハシめハシ口ハシ昆ハシ布ハシ勝ハシ栗ハシやハシ千ハシ世ハシのハシ春ハシ霞ハシ石

伊ハシ勢ハシ江ハシ海ハシ若ハシ水ハシとハシれハシ袖ハシ日ハシ影ハシ頰ハシ可

門ハシ松ハシ竹ハシ若ハシやハシ玄ハシ糸ハシ結ハシ鶴ハシのハシ色ハシ登ハシ鯉

元ハシ目ハシやハシ中ハシ戸ハシのハシ鏡ハシとハシ是ハシ也ハシ比ハシ以ハシ花ハシ葉

門松廿あふ面白は初日新寸松
 大キツリ心あつとくおかけり山眉
 元朝ヤ美経福江所の年木栴
 初より富士見は屠蕪眠哉巖之
 あつたまりよつせは初日新士口
 元朝ヤ珍重くはるは梅鼓
 松や梅我ハ竹なりとて竹を
 門松ヤアつとて家の他松如水
 田他りヤ好えりよふ家の足松栗
 天々下同一腹也今納の春喜友
 合員ウツと屠蕪の盛ヤ里の春栴糸

万葉や門一とく鶴の紋不石
 天の戸松一とくお初日新栴枝
 初春ヤ徳穂の梅のいさよ一耕
 小辰乃尚照燭スヤ明クは春松嵐
 年七月も徳ヤ増方の鏡餅成合
 破ノ弓ヤ欲志了ぬ子もあはれ櫻船
尾陽城南に住事ナニ歳
不知心窓ヲ蓄ニ年有卦ニ入流也
 水石の初日新は初日哉 由橋
今もくくへん花也
 歌は津の梅はまのや今もは所子
 裏白ヤ彩色ぬ初の日新志厚

青物マヤ駒川 残のやふ青暮石
侍歌海老も松を春のよけは松琴昌
鶴の声所世豊よりと鶴の春里雀
橙や彩の子ましく 居る種ゆ解 梅枝
門木の立枝マ見して来ぬ春友梅
油や綻かきゆー 是長如 湖唇

年々 各座の水が
むすのー ー ー ー

向也 我も世も此日の如 水堂
谷水 鬼 ぬく 之 言 哉 小千
三の子良林

享保元 丙申

歳暮

除夜

如筑

巨の寺といふがく鼻楳に年ヶ
敵境マ門の緞乃がーらと申枕
一方の平や白衣く通ぬ大晦日存行
年の暮る方も若西ヤ古曆 農辰名
世は心へ度マ 逢ヤ大晦日素竜
穂長小松竹 賣声ア 三柏子 亀考
一人まゝくやぬ業世 高季侯晴山
錦橋マ 心の花の作よ 今始

一年の清水海と暦哉山扁

直取りを流し春宵より

多く懐い半三月盡す十倍

二年のやあけをく約の遊鱈且東

蝶舞や年経名蹟の鼻の下素全

孫曾孫ふ年割分や年志流里童

福や流すやや金の山形を文雪

堂まの矢流たのりやのる枝香

餅鳩の竹ハキ子持小植哉却么

物のつゝぬ青信

とくあゝく笑つ

孫農より東すいせやのりさう介

とくあゝく笑つ

年経月の春公令の儲哉飛泉

諏訪の世見公年の豊伝と

おれまゝの流り師走の流い

とくあゝく笑つ

もりの海雲元と替り吳見哉同景

あゝと笑つる

あゝと笑つる

鳴ハ指の口をささげたり佳木

餅はもや海と向一と流る泊船

年経春と柳を流すはねに友賀

年の春や擧ハ何喰つ直水

掛乞ハ布川

あゝと笑つる

おれまゝの流り師走の流い

兄のあはれ梅の周るやのさの押糸

小寺の難鳥おはらふの
こころお行ふりゆき

周るのほ宝いと程に龍魚を紋機石

五石入の飄單あり
とちかくして八動の海

雄掃や虎の名を酒瓢 臨之

我女もあはれ月白の年の暮 押塘

かきんもまやこも
いさよーいづこも

目ろくく鶴のや雄掃ひ虎牙

ゆつははききおつとくま九 黄雀

平世と隔ててまゝか
大場へお平世とまゝ流の

紫のあはれをまゝ大晴月 市行

茶光参り禱ふまきり年の暮 膝枕

掛くと侍賢門乃に収軍と文錦

年の市や蜘蛛かく縄と文字豆花

鐘庵大臣し元之大師と

流るる書を龍とて自乃鶏或築笠

とらひの肴板敷ー年の暮る木雞

月のらりぬ除夜ハ袋と卵 湖鳶

苞のまゝきき毛栗とせやのさる友

何とや我子とハおーら秋吟

とと年冬まは日新念ふ
移徒一はれも梅ハ交はり

雄掃や風の巻も海一と舩或

入

出

わのく 二のふあつ如
ろし ねあき事一

人丸け船よりがや年の数も梅坂

洞云時終いこしの頭うぬ栢里

自氣杉成もきうな屋敷 枕星

鏡の下をも蓬妻の

惣合あかかきくさすお平

高季佐や先裏白けさ雷元一步

あつら

餅揚や許詣りれりる私 榎垣

雄掃も野原存仕ゆきり 虎の吹葉

高年七知いけらる大晦日朝山

まふ今今事とらマ

月マ鼻のふらう近

春遠んやつときや大物自震石

今今年十二月小ぬまれ七

猿の尾はく経きやのる吹万

雷乃れはめらねな雄飛 巨舟

羽すして春故吹ひん 鶴の声須可

長初く二番更又きく 雄野櫻の船

衆星の迫りもささや 徳子松風

行年成ちぬ初光れ情 芝響音

行年や目おなさ合の窓の梅登鯉

行年や浪子さうり 鯉け 花紫

ゆきは又今日や娘ゆひけ春寸松

貧乏神遊い掃きり燐掃一竹友
餅花や吉野此思ひ肉もと本研
燐掃いりやく老の頭取三詔
春待や家たあくの新鰯桃林
大年や往來乃今年中休空蟬
燐掃くとわ流遊く行と之掃若水
くくすめ今日一息や年の周琴松
之句や本馬初新燐掃い暮石
節季候や人又鞭打今年此波琴昌
燐掃や嘔り白及冥の下如水
行水はほとけ日記や年の暮所子

何と云ふ可也

年終市や表へ由地と通る人仗直

辛ハ天より

牛と馬と替へくまらけり由橋

大年や世界の窓成めく丸松帯
黄金の山替まらや年の春喜友
行年や流り流り懐口手栢枝
節季候は妙物子ハ琵琶の金糸夕道
尻拂い毎好電見せり丸裸象彦
節季候や種もどく小松高河原本河
節季候や流るる丸の赤大椿

人 共

昔もあんなに大さく

厄もいよいよ一ツ子如

常事小や強而ねむきを流古丈

月や女さほ積ひ々の遠来 全

長命此處河入部の海名し 全

行多神情じやや危る右友梅

汝川の夕少れよ

下ノ一色也

加長袋衣階くせきや〇春嘉吟

おの是は尻食一申や年の春一步

同所

行ははすれす之比のまマの春和笑

同所

海川や春河津一す一身左竹

執事左名位

淀縄子牛けあいも年の春琴ヲ北

同所

行年の小原や岡の梅の春 湖唇

十六番福島

け暮もかまいう女房い産まあらうう羞帆

三品園等

群鳩や八思原の神お流 丈し

同所

儒士の見流く子孫のまきかき前の

肥をくやせ世俗よつとくひひ子

三人と三人は具内一人持ぬ物

男女四本てまの肥人申とてやく

かくいい借り子をましむし年の春 夕待

三品伊保

子をましむ 是貴人

同所

君臣父子何ともや半に歳暮哉松花

人看ぬりせれん

同所

なを流しも心をくちやせの春の女

同所

何れも親あつとけ年の暮る愚明

同所

鼻もいそ掛元仕とて願言哉川舟

三易律保

つらむ月

誰ももふと〜いそよの春種只

日新

子母談とハ美顔麻中

後箱もい〜と子漢屋の春白水

日取

他母は初無〜ヤ冬月陸舟

浪かた尾

本め春減分納足な〜室の梅且子

年の取ヤ分別も皆か〜袋ノ泉

餅物ヤ下戸の麻成年迄流 人

と〜揚く株桐の也青年の暮冬共

行〜や小松〜丸上〜はめし羽竹立

孰草乃厨子の〜探りマ〜の古志守

と〜の事や心伏も刀着〜由之

行年ハ以燈り影〜誰地由一空

風子と〜の事〜年〜
い〜の事〜の事〜

除夜

獨座抱樽 烏葛巾

流一年飲盡 笑錢絹

盡樓 豈美 繩樞裏

適得 臘梅 清我神

負山子

所ニテ難ニ引導シテ成佛セヨ
凡チ子ハニテ難地切リ盡ル
ニテ世元來如生本為地為近
去リ一愚僧ニ言ハク小刀町へ
行ニ是一体和尚小僧乃時時一ヤ
去リニ飲食ヤ引導ハニテ年一ヨ
去リハ丙申十二月廿日ハ又ハ二井橋
我ニテ常々ハ一ヤハニテ
江ノ川ニテ川口一ツ想川云宗皇帝
揚貴地ニテハ一ヤハニテ封地
年我ニテハ一ヤハニテハ一ヤハ
信ニテハ一ヤハニテハ一ヤハ
唱ニテハ一ヤハニテハ一ヤハ

越人

小使ヤ正ニハ海陸夜の雨

京方ニテヤ一ヤハニテ

享保二丁酉年

尾刈禪陽堂冬虫

元日

うの海舟ニテ江川ハ
丁の浪乃ニテハ一ヤハニテ

冬虫

大串ウズ陳々ニテハ一ヤハニテ

元旦

万歳ウズシテ一ヤハニテ

象度

多クハ一ヤハニテ福業 大椿

葉清乃柳ニテ味頃ノ一ヤハニテ 木阿

中二

木阿

為家乃泪たかたに晨朝哉

おまをよし乃あきあき度

魚房みは夜宮を草子前て 椿

中二

全

万歳の手乃あきあきも回る

去年は秋をよみ誰う足あ 阿

六乃あきの三笠わたりあきの 度

元會

應馬

けさの雪を鈴も飾り三保の雲

名月あけてととの夜酒 彈風

さそひりあきあきのいそはる 草水

其二水ハ

全

想ふやあきあきのあきあき

流るるあきあきのあきの 馬

若あきあきあきのあきの 風

其三花乃

全

ひさしあきあきあきのあきあき

歯原と草薺と出づ 水

花乃あきあきのあきのあき 馬

元三

飛泉

夜とあきあき先祖の墓のあきあき

ゆはりあきあきあきのあきあき 素後

あきあきあきあきあきのあきあき 兼登

其二

蘇式八西湖と西施也此ス作者

蘇式八西湖と西施也此ス作者

暖乃市也西施う眉こり

梅可いらるる梅の媚泉

石川ぬ妙三つらりし月後

其三

全

春やよきまのしづかみおぼし

作しつらみおぼし梅笠

山里は三月とを積積し泉

元朝

文錦

破魔弓ハ武々くても錦下

蓮身身れ海老の雛鳳芝響

孟は又花舞に始りて 問景

其二

露暖南枝花始開

全

身好ま乃梅南車と月暮の梅

身好ま乃梅南車と月暮の梅

正三月六文ぬりおぬしはし 響

其三

紅梅の紅りやしきり

可なり梅笠

全

初夏乃梅南車也歌の紅梅し

家ノ梅出ても空宝船 景

梅好ま乃紅梅笠はし 錦

履新

海木

萱草や豊原乃松飾

初日てく動き尾松栞

けしきあふのそとみさび

長二 全

歯固やあしあふくまの道

よ此多移を流る敷の子木

走とあはれに蝶のそとえ

其二 全

代ころゆはりあひつ屠蘇の

齒原の波路と遊つ枝

疾訓の跡と流るる木

聖節

毛腕

四十二を越したのさぬの春

ちがくいふ電の年

歩瀆のほとけもあめて

改萱

熱田新田 洞水

屠蘇乃香りのむのむも実り

春ゆこくや風の陽炎

三日此月入りとたに長あめく

歳朝

冬枯

ふと皆雲の競ふる影のま

はくしけひくく中に浦福

りえあはれ草あめりまで

歳序

東崔

水たぐりくくわしし福出草

初由一和氣う弘色こそ

なほ鞘乃核ハ鶴鶴草風

鶴且

浮橋

いぬのまてめがねを此おゆり

風ひんやりと信ル草書

張で物新たぬも乳とりて

鶴白

鳥石

猿尻くちをま尻んしゆり

ふゆの柄扱ぬ明のす向

三草をきくうたふと筆す

三姑

鷺泊

八寸乃而る白ふく山

色は伝りく山をた虫

誰養者東風カリ口にふ海

正朝

小仙

新魚江後依恬すれつの中哉

有漏の毒と毒宝引

おれと極まり極まり草書

三元

由橋

笑うる花むやむの荒完

寸くし草と延ス草水

岩より石の形

改旦

雨栞

居りたるもの此等やが玉栞

居る藤の青にむくゆ夏 萬始

その家の玉如例の茶のまを侍し 燕甫

其の二

全

白鷺に咽の氷とこといぬ東

よ下乃りまゝに家室川 栞

りりくわのくくくくくくく 始

其の三

くぐらに孔子の傳りたり 全

ユリキ 工橋北典人とうりいしむゆ 甫

よきのりの光あまると研まぐ 栞

享保二丁酉曆歳旦引月

元日

狙ハ賦節の朝三暮四ノ喜怒と
なるとまに二十六銭と侍てりとも
他はとうてく務とあれども

元日は年を賣つぬいぬあり 越人

梅柳 恙きりたりなり之乃 匠 具菓

八葉の七チ刻 峯月形をす 水鶏

雑煮めは恙きり初めは福あき 里童

あけぬりし安んよもか 枝香

そのきわい神代もり 幼小 弓尔

名うま子親子乃不面と小松孔古邑

福あきの好まハ 久田あしと年くに
入極わりのあつとを變務さかういふ

くろくわくまが口の中よりあめが降り
あめがくろくわくまの口の中よりあめが降り
子流子六羅重なりてくろくわくま
木曾福富

思少つの大具也とさきそつ 一音

凡ん人の思ふくろくわくま 湖唇全

山井ノ丸乃香居住やゆき春全野尻 一歌

諷くも鳥市に詠日乃清 汀鱗

乃川をいなまゝの夜松橋不 古語

実地をう盤の神さけされ云 兔猴

若水乃その根を留まれば 鹿布

一帯の市乃夜なれやまことゆ 泊船

土器乃かしくもそりた庭藤根 釣草

袖籠も鳳凰をうりなつう流 友賀

徳信の法代かあややけの春 橋新

若くいふくろくわくま乃長 直水

明乃をんくろくわくまのゆらん 湖舟

若水や万年北縁に満り幾田 冬栢

天地乃けふの童くろくわくま 萬喜同

若水やえん金生乃くろくわくま 梅災同

くろくわくま和國の情を定つ春同 遊度

居籬乃砵師の弁敬を定つ同新田 一笑

乾坤の位定ぬ初りくろくわくま 暮山同

海揚て水暗くろくわくま乃春 松嵐

くろくわくま先づ梅落ると春梅 逢石

くろくわくま白くろくわくま 櫻船

夢ゆやくろくわくま六本橋の面 重里

若水より海をさぐりては海ありし 卜曲
 裏白と袴かてて小殿より 残更
 ともありあや湯の湯に松の世 松遊
 昔より乃ち夏をほろりとて 狂り女
 夕顔自ふ老木の種もたに海 不石
 やと嗤笑ひめとて凡難煮介 慶生
 福祿壽及びおのれは法に係 羅羅
 心もやがけ都安全乃ち縁 暮石
 船玉や子声なむむく市 琴昌
 猶里とてまをかく
 田舎とてふ 作舟津山
 筆の掃かてあふ山嵐 雨滴

享保元 申 歳暮

いのおとく活し 瓢箪はけりやも
 田舎外古りの店ふりてくく老の
 ときとてわたるくくゆん 古渡堂
 晴燕

瓢箪丹持のゆめはしのち

とくゆめは巴 終夜お猪湯 應馬

居風呂や 暮浪の舟 舟 里童

屋の夏ゆめ
 白ゆめ

夏の色乃ちそそ 寂し大嘗 芝郷音

春種はゆめをけりての春 尚景

板屋の夏ゆめ
 人のゆめ

作もくは強流七才 船無音 蓑笠

春の色やゆめをけりての春 千流

燦々たる鱗と各よきとや 古邑
身は少人におあつた年の市 芒鐘
うけんとて舞臺をわたり梅苑 芳水
を牡丹狸絲のりのるきよ 彈風
とくふかぬ舟車めをきき 萬始
はさうしややとるきよのあはれ 燕帝
あまみく子とてやゆふふ松葉 雨柳
石橋とありり川の年市 鷹弁
清鏡乃の影く移りぬるきよ 枝香
空を渡る流れてとらけの泡 湖舟
さうのゑとて鈴池のわがよの 直水
春風とて半卦に隣り 鷹弁 泊岸

諺ハまきぬたりとらーのえ 女賀
おき産のくくやりり大晦日 泊船
併協つくとらを布袋の作花 亀腕
りけとて色ゆるんくく 塩虎 琴昌
水滸ゆけて襦きよし年の浪 暮石
清浦ス懐くはよし くのふ一瓢 木曾野尻
梅もなれぬとて流れる年の浪 羅雀
是のりつとて色とて色とて 交生
まらんとてとて色とて色とて 石石
塩鱈とて色とて色とて 汀鱗
梅柳つと太史の指か帯底 松平下
牛のりつとて色とて色とて 柏枝

備留り藤原清隆より海本
 牛頭鳥辺とてく金三郎小仏
 湖の深しき多し大毎日一笑
 馬三坂のつらき丹波のれ 道石
 清く笑ひける実徳の事 由橋
 年暮のふし併死の縁小 湯沼
 葱乃ヒモシふい合々ヒモシ 雲 亀石
 ゆかりをうくヒモシ 浮橋
 所分々ヒモシ 東雀
 白猫や尾の尻ヒモシ 冬祐
 冬祐ヒモシ 冬祐
 節屋のヒモシ 大椿

厄拂とて此尾ヒモシ 丸祿 象度
 節屋修々ヒモシ 木阿
 何事ヒモシ 弓矢
茶屋のヒモシ
名のわくとあゆんで

巴ヒモシ 長業
都ヒモシ
金買者ヒモシ
 柳ヒモシ 越人

名は丘隅ヒモシ
一世活ヒモシ
の境ヒモシ
 藻元炭
 夾始

歳末

筒口

の志し移り斬の侍傳

古鐘は焼かたりて皇神 萬始

雲のまを風と合まれば松遊

耳のゆきまのれ野の戸ト曲

篋月と隅りて朝のそ 盛更

折ふゆゆりて忘るるの香 翁候

ひうらて金作の梅のの 亀山

うしのこ乃客にまの 筆

折筆

京のつらまゝの

享保二丁も年

歳暮

ふりたりと掃きまきやゆけぬる 川上

山梨と

あ氷のあまを立ッやと船に春川上

同

慶長の令に心やうらのまを布粉

ねながれりまをこれらりやと船の 雪庭

伏見傍

牛ぬへよ梅雨細きまねかか 武明

白井

京寺町通二条上町

誹諧三物所井筒屋庄兵衛板

